

翻訳児童文学としての『ロビンソン・クルーソー』

——訳者・解説者はどう見てきたか——

佐藤 和哉

はじめに——宮崎駿と『ロビンソン・クルーソー』

アニメーターの宮崎駿は、2011年に岩波少年文庫から50冊を選んでそれぞれに簡単な推薦文を書いているが、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660?-1731) の『ロビンソン・クルーソー (*Robinson Crusoe*)』(1719-20年) (以下では引用文をのぞき『ロビンソン』とする) について、次のように述べている。

とてもおもしろい、ワクワクする本です。でも... ぼくは大人になってから、この本のトゲに気がつきました。主人公が銃を持っていなかったら、どうだったでしょう。おそらくずい分みじめな暮らしになったと思うのです。この本を読んだ白人達はかならず銃を持って、他の島や国にいて宝物をとりあげたり、人を撃ちころしたりして世界中を荒しまわりました。

ぼくは銃を持っていないし、持つ気もありません。おもしろいけど、気になるところもある本です。(38)

さらに宮崎は、「たとえば『ロビンソン・クルーソー』は、今読むと、世界を植民地にした白人の行動原理が分かっちゃって、推薦していいものやら悪いものやら迷うものの、やはり『漂流もの』のなかで一番よくできているんです」(82) と述べていて、ここにはいわゆるポストコロナルな視点からの批判と、子ども向け冒険物語としての一定の肯定的な評価の両方が見られる。これは、戦後日本において「児童文学」として『ロビンソン』

を見たときの、一つの到達点であると言えるだろう。

筆者は、戦後まもなく出版された、南洋一郎による『ロビンソン』の再話について論じたことがある。この再話ではクルーソーは心身ともに頑健なヒーローの主人公であり、戦後に出版されたものであるにもかかわらず、戦闘的な愛国主義が透けて見えるテキストであった。

本稿では、このように『ロビンソン』を提示しようとするテキストから、先に紹介した宮崎の評言にいたるまでの道程を確認したい。そのために、第二次大戦後の日本において『ロビンソン』が児童文学としてどのように紹介されてきたか、をたどることとする。ここで着目したいのは、日本における再話の場合、訳者や解説者が、子どもの読者を指導する立場にある大人、あるいは子どもたち自身に対して、この作品に対する注釈や作品の「読みかた」を述べていることである。つまり、これらのコメントには日本の英文学者、翻訳者、児童文学者がどのようにこの作品を捉え、それを日本の子どもに伝えようとしたかが表れていると言える。それらの解説者が、この作品にどのような「教育的」効果があると考えていたか、そして、この作品においてもっとも問題となる人種や植民の問題をどう考えていたか、に着目しながら、本稿では、戦後において、このような「解説」がどのように変化していくかを検討する。

再話のスタイルの2系統

明治32年に巖谷小波が『世界お伽噺』のなかの一冊として以来、明治後期から大正、昭和初期にかけて、『ロビンソン』は子ども向けの物語としてさまざまな形で再話された。昭和期にはアジア・太平洋戦争直前にいたるまで、日中戦争開始後の1938(昭和13)年にも平田禿木と南洋一郎による再話がそれぞれ富山房と講談社から出版されている。また、戦争勃発直後(奥付によれば昭和16年12月15日発行)にも佐々木直次郎による訳が主婦之友社から出されている。太平洋戦争中は出版されていないが、戦後すぐの1946年にはすでに南による再話が大日本雄辯會講談社から出版さ

れている（時局に関わると思われる一部の改変をのぞき、1938年版と同テキスト。また、1950年版とはまったく同じ）。

佐々木の再話は、基本的に原作に忠実であるが、訳者の取捨選択によって内容が省かれていたり描写が簡潔になったりした「簡約版」とでも言うべき種類のものである。戦後このような種類の再話は、阿部知二、飯島淳秀、中野好夫、海保真夫など、翻訳者としても名高い英文学研究者たちによって数多く作られた。この種の再話のスタイルでは、たとえば、ほとんどが帰国したあとのエピソードを省略するなど、全体を切り詰めてはいるものの、原作に書かれていないことをつけ足すことはまずないと言ってよい。

それに対して、南の再話は、原作にない場面や性格づけ、設定などを積極的に入れて物語を再構成しており、その後は、久保喬や大平陽介、小沢正など、子ども向けの読みものを書く作家を中心にこのタイプの再話がなされてきた。この種の再話では、ロビンソンをはじめ登場人物の性格や物語の構成に変更を加え、場合によってはオリジナルにはないエピソードをつけ加えることによって、日本の子ども、特に年少の読者に物語を分かりやすくすることが目指されている。

最近の例を挙げると、前者の例としては、2004年に海保真夫（訳者逝去のため一部と解説は原田範行）による新訳が岩波少年文庫から出版され（旧版は1952年の阿部知二による）、2007年に『ロビンソン漂流記』として澄木柚訳でポプラポケット文庫から出版されている。また、2010年には講談社の「21世紀版少年少女世界文学館」に飯島淳秀訳に註をつける形で『ロビンソン漂流記』が収められている（ただし、内容は1988年出版のものを再構成）。後者の例としては、1999年に講談社の「世界の冒険文学」シリーズに「伊集院静・文」として収められていて、これは、2002年に、『伊集院静のロビンソン・クルーソー』として同社から再編集された。ただし、とくに若い読者を対象にしたものを別にする、と、伊集院の再話は例外に近く、原作にない要素をつけ加えて物語を再構成することは、近年あま

り行われなくなってきた。

なお、国際子ども図書館（国立国会図書館分館）のデータベースで、「タイトルに『ロビンソン』を含み、著者が Daniel Defoe である」児童書を検索すると、88 件がヒットする（タイトルには、『ロビンソン漂流記』、『ロビンソン・クルーソー』、『ロビンソン・クルーソー』などがありうるが、『ロビンソン』の部分是不変である）。このなかには再版された同一テキストも含むが、いずれにしても相当数であり、本稿で触れることのできたのが、そのごく一部であることはあらかじめことわっておかなければならない。

阿部知二による紹介

戦後、最初期の『ロビンソン』の翻訳として、発刊されてまもない岩波少年児童文庫に収められた、阿部知二による訳（1952（昭和 27）年）がある。阿部の後書きには、後の訳者説明のテンプレートとも言いえるようないくつかの説明がそろっている。それは、第一にクルーソーの努力や知恵、工夫の称揚、第二に経済学との関連の指摘、第三に作品が書かれた時代の説明、そして第四に作品を簡略化したことに関する説明である。少し長くなるが引用してみよう。

まず、なんといっても、この海洋と孤島とを舞台にした冒険ということが、少年ばかりでなく、おとなたちまでも強く引きつけるのは、あたりまえのことです。[...] クルーソーが、ただひとりで島に流れつき、自分の努力と工夫とで、生活をきずきあげてゆき、いろいろな生産をする、ということが、大きな魅力になっているのです。[...] 一事のついでに言えば、人間が、ただひとりで生産し、消費するということを、経済学の問題として、この本を種に論じた学者もあります。[...]

そのころイギリスでは、この物語にも見るように、中産階級がおこってきて、商工業をさかんにし、いわゆる「産業革命」をおし進め、国を繁栄させました。一方で、彼らは、非常な勢で海外に進出して、貿

易をしたり植民地をつくったりしました。「大英帝国」が着々と建設されたのです。ロビンソン・クルーソーも、そういう事業をした、選手のひとりだったわけです。[...]

そのころの彼らは、[...] まじめで、信仰が深く、道徳を重んじる人々でもありました。この物語の中の、お説教じみたところは、そういうことを理解した上で、読んでいただきたいのです。またこのクルーソーが、けっして乱暴な侵略者ではなく、当時は仲の悪かったスペイン人等にも、正直につきあい、イギリス人の悪いところは悪いとし、また野蛮人のフライデイたちに対しても、人間としての愛をもって接しているところに、デフォアの文学のりっぱさを見ます。(277-278)

先ほど挙げた特徴のほかここにここで指摘しておかなければならないのは、フライデイに対するクルーソーの態度を「人間としての愛をもって接している」と表現している点である。フライデイが従来から持っていたはずの「名前」を取り上げ、「曜日」というヨーロッパの秩序による名前を押しつけたクルーソーの植民地主義的性格を批判する視点は、ここにはない。この時代の阿部にそれを求めるのは時代錯誤の誹りを免れないかもしれないが、後の訳者との関連で言えば、この感覚の不在を確認しておく必要はあるだろう。

中野好夫の態度

昭和 30 年代には飯島淳秀による訳「ロビンソン漂流記」が出版されているが(『少年少女新世界文学全集 イギリス古典編(1)』講談社、1963(昭和 38)年所収)、作品に対する姿勢として阿部と大きく異なる点はない。昭和 40 年には、中野好夫によって『ロビンソン漂流記』(『少年少女世界文学全集』第 5 巻『ロビンソン漂流記』、1965(昭和 40)年)が出る。なお、この本は 1995 年に「講談社青い鳥文庫」の 1 冊として復刊する。中野は、250 年ばかりもまえに「みなさんとは地球のうらがわのイギリス人」が書いた本がなぜ世界じゅうで今でもよまれているか、という問いを發し、それに対する答えとして、

ロビンソン＝クルーソーというひとりの男が、難船して大洋の無人島に漂着する。ふつうならばそのままうえ死にでもしてしまうところですが、ロビンソンはあらゆるちえをはたらかせて、その無人島に着々と人間の生活をつくりあげていく、その漂流奇談が『ロビンソン漂流記』—そうです、答案はそれでけっこうです。(336-37)

と述べており、そのかぎりでは「ただひとりで島に流れつき、自分の努力と工夫とで、生活をきずきあげてゆき、いろいろな生産をする」ことがこの物語の魅力であるとした阿部と大差はない。中野の説明が興味深いのは、内容についてだけでなく、写実的なデフォーの文章のスタイルに言及している点である。次の引用を見よう。

いうまでもなく、ロビンソンの経験は、わたしたちの日常の生活とはおよそほど遠い、大洋の中の無人島という、それこそ何十万人のうちのひとりも実際には知らない世界のできごとです。ところが注意して読んでください。それをこのデフォーは、まるでわたしたちのついで身のまわりにでもおこったことのように、じつにたんねんに、まるで目の前に見るように書いています。これがデフォーの想像、そして筆の秘密です。(337-38)

と、このようにデフォーの描きかたの写実性を指摘する。子どもの読者の注意を内容についてだけではなく語りの方にも向けようとしている点は新しいし、一流の文章家として名を残した中野ならではの指摘とも言えるだろう。また、中野は、自分の再話をどのような読者に向けたか、について、

みなさんはきっと、まえに子ども用に書いたロビンソンを読んだことでしょう。だが、将来おとなになったら、こんどはもとのままの形で読んでください。たいした本であることがわかるはずです。ここでは、その子ども用と、大人向きのもとの本との、ほぼ中間をねらって編集したつもりです。(338-39)

と述べている。このように読者を「子ども」と「大人」の「ほぼ中間」と

して設定した、という中野の発言を、子ども相手にはあるいは若干難しいかもしれない表現技法（上で述べた写実主義）についての言及とともに考え合わせると、この再話を「子ども向け」と位置づけながらも、それだけに終わらせたくない、といった中野の姿勢が伺える。

さらに中野は、「おとな用としてのロビンソン物語」の意味は、「ロビンソンは[...] 経済学のほうでいう資本主義というものの初期の原理、精神をみごとに書いている」ことにあると言い、さらに「この本の出たころは、ちょうどイギリスという国が、資本主義という新しい精神に乗って、ぐんぐんのびようという上げ潮にあった時期です」(339)にあると述べている。クルーソーと資本主義を結びつける考えかたそのものはマルクス以来であるが、大塚久雄が『社会科学の方法——ヴェーバーとマルクス』（岩波新書）に「経済人ロビンソン・クルーソー」を書いたのが翌1966年である。このころの一つの理解の形として、「資本主義の精神＝ロビンソン＝経済発展」の構図があったのではないかと考えられ、その点では、中野の説明はこの時代の一つの知的潮流に乗ったものだと言える。一方で、ある意味で資本主義の礼賛ともなりかねないようなこの言辞をそのまま持ってくるところは、硬骨な進歩的知識人である中野らしくないとも言えるかもしれない。

昭和から平成へ

この後、筆者が実際に現物を確認したものについてだけでも、久保喬「ロビンソン＝クルーソー」（『少年少女世界の名作文学3 イギリス編1』小学館、1967（昭和42）年所収）、坂井晴彦『ロビンソン・クルーソー』（福音館古典童話シリーズ、1975（昭和50）年）、小沢正『ロビンソン漂流記』（ポプラ社「こども世界名作童話」12、1987（昭和62）年）、はやしたかし『ロビンソン・クルーソー』（集英社「子どものための世界文学の森」16、1994（平成6）年）などの翻訳が出版され、上述のように、久保や小沢、はやしの再話は単なる抄訳にとどまらず、内容に踏み込んだ改編を加えてい

る一方で、坂井のものは比較的忠実な訳となっている（ただし、島の生活からあとは大胆に省略している）。

これらの再話者たちは、作品理解という点では阿部・中野の路線と大きく異なるところはない。そのなかで、『目をさませトラゴロウ』（1965年、理論社）を始めとする児童文学の実作者でもある小沢はクルーソーの「人間性の魅力」に着目し、「[...] ロビンソンは、そのあと、なにかあるたびに、オロオロしたり意気消沈したり絶望したり、そうかと思うと、ちょっとしたことから有頂天になったりと、さまざまに心をゆれ動かされます。ヒーローなどといったものではなく、どこにでもいるひとりの人間としか見えない」一方で、「生きのびようとする意欲の面では、はなはだしたたか」だと評している（132-33）。また、クルーソーの暮らしを「人の一生」にたとえ、

人の一生も、はなれ小島でのひとり暮らしと似たようなもの。そこには、さまざまな苦しみや困難がまちかまえているにちがいないが、けっしてくじけてはならない。オロオロしたり、意気消沈したりしながらも、さいごには知恵と力をふるって困難を乗り越えるように努力することが大切だ。（133）

というメッセージが作品に込められているという。実は、デフォー自身、『ロビンソン』の物語を人生の寓話として描こうとしたことが伺われ、デフォーの言説の「事実ではないが事実だ、という要請は、これらの作品が、とくにロビンソンの漂流の記録が、自分の人生のさまざまな体験の寓的な表現なのだという意識を強めたであろう」（平井 178）というような指摘と重ね合わせると興味深い。

1988（昭和63）年の講談社刊「少年少女世界文学館」の第5巻に収められている『ロビンソン漂流記』は、基本的に飯島淳秀が1963（昭和38年）に翻訳したものと同一テキストであるが、この版でもっとも特徴的なのはテキストに「註」が施されている点で、子どもの読者に難しいと思われる言葉に対する傍注のほか、内容に関わる頭注がところどころに付されてい

る。すでに何度か触れたコロニアリズムの観点から、いくつか驚異深い点
がこれらの註には見られる。

例えば、はじめのほうで、「黒人をおおぜい買う」という記述には、「十五世紀以後、おもにアメリカ大陸で、労働力不足をおぎなうため、アフリカから黒人をどれいとしてつれてくるようになった。故郷からはなれてるので、にげるおそれもなく、十六～十八世紀には綿花の栽培などの重労働にさかにつかわれ、人道上の大きな問題となった」(44)という註がつけられている。「註」というパラテキストにおいてであれ、『ロビンソン』における奴隷問題を取り上げた再話は、筆者の調べたかぎりでは初めてと言ってよい。1988年は、岩波書店ほか各社が各種の抗議運動の高まりを受けて『ちびくろサンボ』の出版を取りやめた年でもあり(径書房編)、そのことの是非は別として、子どもの本をめぐる状況のなかに、人種差別やその歴史的背景についての意識の高まりがあったことは間違いのないと思われる。ただし、児童文学研究者であり、翻訳家でもある神宮輝夫による「解説」ではこの点が一切触れられていない。

註による対応という点では、はやしたかし『ロビンソン・クルーソー』(集英社「子どものための世界文学の森」16、1994(平成6)年)も同様で、たとえば、「どれい」という言葉に註がついていて、「牛や馬とおなじように使われ、自由もなくはたらかされ、また売り買いされた人間」(18)となっている。同様に、「人食い人種」に註がついていて、「こういう人しゅや民族はいません。昔は世界のどこかに、人をたべる人たちがいるとおもわれていたのです」(34)となっている(ただし、これも1988年講談社版と同様に、はやしによる解説中に奴隷や「人食い人種」という表現についての言及はない)。「食人種」の言説がきわめてヨーロッパ中心主義的かつ帝国主義的であることを指摘した、正木恒夫の『植民地幻想』(みすず書房)の出版が翌95年であることと関連させて考えれば、1990年代の半ばには、日本の知的風土の少なくとも一端が「食人」という言説への意識を持つようになってきた、と評してもよいのかもしれない(それが全体的に

言えるかどうかは、これも別の問題であろうが)。

現代

伊集院静『ロビンソン・クルーソー』（講談社「世界の冒険文学」19、1999（平成11）年）はいろいろな点で画期的である。まず、幼年向けでなくダイジェストの度合いが低い再話は、飯島のものの再版を除くと、昭和50年の坂田のもの以来であり、およそ四半世紀ぶりということになる。次に、物語がメディアス・イン・レースで書かれていることそのものは日本の翻訳では珍しくないが（おそらくこれが南洋一郎の影響によるものであることも、世界的に見ても日本ほどこの形式の再話が頻繁に見られるのは希有だろうことも、未だ論証はできていないので今後の課題としたい）、たいていの場合、南の例にならって、いずれかの嵐の場面で始めるのが定番となっているのに対し、伊集院の再話は、島に漂着するところからとなっている。

本論の文脈でもっとも注目すべきは、伊集院も、またこれに解説を寄せている小池滋も、奴隷や人食い人種について説明しようとしている点である。伊集院は「あとがき」で次のように述べている。

物語のなかで人食い族の話が出てきて驚かれたでしょうが、世界の多くの地域で、この風習がまだ残っていた時代なのです。人が人を食べることがいけないことは今の私たちにはあたりまえですが、私たち人間がそんなことをしてきたことは知っておくべきですし、また「奴隷」といって、人が人を道具のように売り買いし、働かせていたこともあるのです。そんなひどいことを世の中からなくしたのは、人の心にある、「皆同じ人間なのだから」という平等の気持ちです。「蛮人」などの言葉も、この本のなかでは、原作にしたがって使いましたが、人がたがいに理解し、差別する心がなくなることで使われなくなりました。言葉もまた生きているのです。(269)

そして、「解説」を付した小池滋は、

[...]ロビンソンをただ見習うだけではだめだ、と批判する人もいます。白人がアジアやアフリカに乗りこんできて、その原住民をこき使って、その自然のめぐみのいいところばかりひとりじめにしてしまったが、これこそロビンソンのやったことだ、と。ロビンソンはたしかにフライデーを助けてやったが、けっきょく、自分が助かりたいために原住民を利用しただけじゃないか—こういう批判も出ています。人を食うことを悪いと思っていない原住民を、むやみに鉄砲で撃ち殺すのはまちがっている、と考えていたロビンソンなのに、食われそうになっているひとりが白人だとわかったとたんに、大勢の原住民を撃ち殺してしまい、それをまったく反省していない[...]。これこそ、白人だけが尊いとする、差別の姿勢ではないか、という批判も出るでしょう。

と『ロビンソン』への批判的な立場も紹介しているが、その見方を読者に押しつけるわけではない。小池は、『ロビンソン』が批判されながらも読み続けられてきたことに意義があり、その読まれ方の多様性こそが重要だという。

このように『ロビンソン・クルーソー』の物語は、発表されてから二百八十年もたったいまでも、世界じゅうの読者に、いろいろなことを考えさせてくれるのです。現代人がお手本として見習うべき点もたくさんあるでしょう。ぎゃくに、見習ってはいけない、反省しなければいけないお手本となる点も、やはりたくさんあるでしょう。いや、そんなめんどろなことは考えずに、ただ、ハラハラ、ドキドキする楽しい物語として読むだけでもよいでしょう。

そうなのです。すぐれた文学は、いつの時代にも、いろいろな人に、いろいろな読みかたをさせてくれるのです。みなさんも、ここでわたしがいわなかったような、べつな新しい読み方を、ぜひ見つけてください。(278-79)

と述べていて、ポストコロニアルな読みを紹介しつつも、そこだけに読者の読みかたを限定しないでおこうとしている態度は、リベラルな教育的態度と評することができる。

最後に、もっとも最近の再話を2冊検討しておこう。一冊は海保真夫訳

による、岩波少年文庫の新版の『ロビンソン・クルーソー』（岩波書店、2004（平成16）年）であり（訳者逝去のため原田範行補訳）、もう一冊は、ポプラポケット文庫の一冊として出版されている澄木柚『ロビンソン漂流記』（ポプラ社、2007（平成19）年）である。

岩波少年文庫の新版には、度量衡や貨幣についての換算表と当時の帆船の見取り図や世界地図などがあって大変参考になる。さらに、原田の解説には、デフォーの生涯や「冒険物語」としての面白さなど、これまでの解説や後書きにも見られた説明だけでなく、新しく付け加えられた要素が数多くあって興味を惹く。例えば、生活が安定してきたクルーソーの場面を引きながら、

あまりにも多くのものが目の前にあって、何をどうしてよいのかわからなくなってしまったり、どれもこれも中途半端に終わってしまって少しも満足できないというような状況は、現代の私たちの生活にもよく起こります。そんなとき、ロビンソン・クルーソーの孤島での質素な生活は、逆に、ふしぎな充実感に満ちているようにも思えます。
(343)

と述べている箇所は、無限に自己増殖する資本主義と通底する物語として『ロビンソン』を批判する立場（もっともよく知られ、またその調子が激烈であるのは岩尾龍太郎だろう）への再批判のようにも取れ、十八世紀小説の専門家である原田の面目が伺える。

同様のことは、『ロビンソン』が、デフォーが宗教的に「嘘」を嫌ったために詳細な事実を数字とともに挙げていることについて、それがフィクションを嫌う風潮への配慮だけではない、「より大きな効果」に結びついていると述べている点にも表れており、この物語が「不思議な驚くべき冒険」を描きつつ、「じつは、私たちの日常生活をもうかびあがらせていると思われるのです」と説明して、それがこの作品を「近代小説」の起源のひとつと見なされてきた理由のひとつであるとしているのは（345-46）、やはり原田の知見の表れだと言えるだろう。この原田の指摘は、一見したところ先

に見た中野の説明と似ているようであるが、中野がデフォアの描写の写実性を問題にしたのに対し、原田は私たちの日常生活を構成しているディテールのアクチュアリティに焦点を当てている点が異なっている。また、この作品が多く疑問を生むとともに、「新たな想像力の源になってきた」ことを魅力の一つと見なしている点は、先に小池の示した、「読みの多様性」にも通じるものがある。

さらに、これまで何度か問題にしてきたコロニアルな関心については、

本書の文章のなかには、「蛮人」ということばが多く使われていきます。[ルネサンス以降、それまで知らなかった土地をおとずれたヨーロッパ人が] そのとき目にした現地の人びとの姿を、かれらは「蛮人」(savage) と呼んだのです。現地の人びとにしてみれば、突然やってきたかれらこそ「蛮人」であったわけですから、こうした差別的なことは使いは厳に慎むべきであるといえます。ただ、そうした呼称が実際に存在したこと、そしてそういうところから出発して、ちょうどクルーソーとフライデイとの友情のような人と人との強いつながりが少しずつ生まれてきたこと、[...] 当時のヨーロッパの人びとにしても「蛮人」という呼称が必ずしも軽蔑的な意味合いのみを持つものとは限らなかったことなどを勘案して、本書ではそのままこの訳語を用いることにしました。[...] 世界じゅうの人びとがほんとうに交流できる心のつながりとはどういうものなのかを考える機会にもなればと思います。(348)

とまとめていて、『ロビンソン』に見られるさまざまな人種間の表象を「差別表現」といった局面に矮小化することを戒めている。一方、先に検討した阿部知二と同様に、原田がクルーソーとフライデイの関係を「友情」、「ヒトとヒトとの強いつながり」と表現している点を見ると、伊集院や小池ほどには、作品自体のポストコロニアルな性格を指摘することに重きを置いていないことも伺える。

澄木柚『ロビンソン漂流記』(ポプラポケット文庫、2007(平成19)年)の「訳者解説」は次の二つの点でユニークである。一つは『ロビンソン』

とエコロジーとの関係を指摘している点で、二つめは、きわめて自覚的に「原住民」という訳語を選んだ経緯を説明している点である。

柚木の説明では、「ロビンソンの時代から三百年たった現在、地球環境の悪化が急速に進み、エコロジー活動や“もったいない”運動が広がっています。質素な自給自足の生活をおくったロビンソンは、まさに“もったいない”精神を実践していたといえるでしょう」(190)ということであり、また、用語については、

なお原作には、大陸の先住民をさして“野蛮人”[サヴェージ]とか“食人者”[カンニバル]とかいう言葉が多くでてきます。イギリスは一六世紀ころから近代にかけて、スペインやポルトガルなどのヨーロッパの列強と競って冒険航海に乗りだし、多くの植民地をつくりました。この時代に、初めて目にした現地の人びとを不当に野蛮視した結果、食人者のイメージがつくられた場合も少なくなかったのです(民族によっては、一族の一員の死を悼んだり、敵に対する復讐や勇気を誇示するために、信仰や儀礼と結びついたこうした習俗がまったくなかったわけではありません)。本書では“原住民”としました。(190)

と述べていて、食人の風習が一部にあったことを認めつつ(これは先に見た集英社版の註と見解を異にしている)、あえて原語のコロニアルな含意を除くために「原住民」という用語を使ったことを説明している。この二つの指摘はどちらも、『ロビンソン』を見るうえでの意識が変わってきたことを示している。その一方で、澄木は、これまでの解説が必ずと言ってよいほど言及してきたように、「自身の頭と手足を使ってくふうし、おそろしく長い時間をかけて目的を達していったロビンソンの態度」(190)を称揚している点で、従来の『ロビンソン』受容から大きく逸脱することもしていない。

結び

以上は、『ロビンソン』が戦後、翻訳児童文学として紹介されてきた様子の一端をごく簡略に概観したに過ぎないが、不十分ではあれ、ある種の見

取り図を得ることができたのではないかと考える。すなわち、『ロビンソン』を、クルーソーの知恵や努力、精勤を描いたテキストとする示しかたは、戦後から現代にいたるまで変わっていないこと、その一方で、程度の差こそあれ、このテキストのもつコロニアルな性格に対して読者の意識を喚起しようとする方向づけが1980年代後半から始まってくること、そして、2000年代にはそれ以外に、時間感覚や人間の生のアクチュアリティ、それにエコロジカルな関心などにも、再話者たちが読者の目を向けさせようとしていること、などを見ることができる。

今後の課題を三点指摘しておきたい。一点目は、ここで取り上げたような大手出版社から刊行された「有名な」翻訳だけでなく、戦後すぐの時期に数多く出されたものを中心に、より多くの再話についても同様の手続きを試みることである。議論の精緻化のために必要不可欠であろう。二点目は、本稿に欠けている、再話そのものの詳細な検討である。いくつかのキーとなる再話のテキストの検討は、ここで示した概観を検証していくうえで必要な作業である。三点目は、戦後日本における『ロビンソン』受容の多様性への着目である。一般に「ロビンソナード」といわれる『ロビンソン』変形譚もまた、翻訳児童文学として日本で児童書として出版されてきた。そのなかで最も有名なものとされる『宝島 (*The Treasure Island*)』(1881年)が、阿部知二によって、同じ岩波少年文庫から出版されていることは興味深い符号である。そのほか、これはイギリスのものではないが、『十五少年漂流記 (*Deux Ans de Vacances*)』(1888年)なども考慮の対象とするべきだろう。さらに、ある時期までの日本のポピュラー・カルチャーのアイテム(とくに子ども向けの)、たとえばマンガやアニメにも、『ロビンソン』の物語はさまざまに形を変えて姿を現している。戦後日本における『ロビンソン』物語の受容を追うためには、これらの検討も必要となる。以上の三点を今後の課題としたい。

参考文献

岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』(青土社、1994年)

径書房編『『ちびくろサンボ』絶版を考える』（径書房、1990年）

佐藤和哉「南洋一郎『ロビンソン漂流記』：戦後日本における受容のケース・スタ
ディ」（『比較文化研究』106号、2013年、pp. 235-247）

デフォー、ダニエル（阿部知二訳）『ロビンソン・クルーソー』（岩波書店、1952年）

——（飯島淳秀訳）『ロビンソン漂流記』（講談社、1988年）

——（伊集院静訳）『ロビンソン・クルーソー』（講談社、1999年）

——（小沢正訳）『ロビンソン漂流記』（ポプラ社、1987年）

——（海保真夫訳）『ロビンソン・クルーソー』（岩波書店、2004年）

——（中野好夫訳）『ロビンソン漂流記』（講談社、1995年）

——（はやしたかし訳）『ロビンソン・クルーソー』（集英社、1994年）

——（澄木柚訳）『ロビンソン漂流記』（ポプラ社、2007年）

平井正穂「孤独な人間ロビンソン・クルーソー」『十八世紀イギリス研究』（朱牟田
夏雄（編）, 研究社、1971年、pp. 172-184）

正木恒夫『植民地幻想——イギリス文学と非ヨーロッパ』（みすず書房、1995年）

宮崎駿『本へのとびら——岩波少年文庫を語る』（岩波書店、2011年）